

## 松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】江添 誠

【所属】慶應義塾大学大学院文学研究科史学専攻民族学考古学分野

【研究題目】

トランス・ヨルダン地域のローマ化に関する考古学的研究

【研究の目的】

本研究の目的は、トランス・ヨルダン地域（シリア南部のゴラン高原からヨルダン川の東西の流域）における紀元前1世紀から後5世紀にかけての「ローマ化」と呼ばれる現象を通じて、支配をする側、される側が、それぞれに受容したものと拒絶したものの境界はどこにあるか、物質文化や都市の景観にどのような影響を与えているのかという問題を、考古学調査や遺跡踏査によって確認される遺物・遺構の分析を中心に、文献史学、宗教学、聖書学、地理学、建築学などの成果を重ね合わせて検討し、解明することである。

特に当地域に点在したデカポリス（ギリシア語で10の都市）と呼ばれるローマ帝国の介入によって飛躍的に発達した都市群における発掘調査の成果を考古資料の中心にすえて分析を行い、ヨセフスの『ユダヤ戦記』や福音書の記述などを照らし合わせてデカポリスの形成と性格を検討し、それらの都市の発展にローマがどのように関与して「ローマ化」が進展していったのかを明らかにしていく。

【研究の内容・方法】

本研究はイスラエル国、ヨルダン王国の二つの国で現在行われている発掘調査に直接参加し、そこで得られたデータを中心に周辺の遺跡踏査による情報や文献史料と組み合わせて研究を行った。発掘調査に参加した遺跡は、イスラエル国ガリラヤ湖東岸のヒッポス遺跡とヨルダン王国北端に位置するガダラ遺跡で、これらはいずれもデカポリス都市として数えられている。

2008年および2009年の夏期は、7月をヒッポス遺跡で、8月をガダラ遺跡で調査を行った。ヒッポス遺跡は都市の中心にあるヘレニズム時代からビザンツ時代まで用途を変更しつつ改修して使われ続けた複合施設の発掘を中心に、ローマ時代の主要道路（デクマヌス・マキシムス）の建設年代を確定するための試掘や、都市の西側に位置する小劇場の検出作業を行った。ガダラ遺跡は都市のほぼ中央に位置する初期ローマ時代の市門を中心に、主要道路に沿ってその北側の発掘を行った。これらの発掘作業の前後に他のデカポリス都市および関連するローマ時代の遺跡の踏査を行った。

2009年3月下旬の2週間で、シリア共和国南部からヨルダン南部、エジプト北部に至るデカポリス都市および関連遺跡の踏査を行い、遺跡の現状と現地での資料収集を行った。シリアは出版事情が悪く日本では入手困難な資料を多数入手することができた。

これらの発掘調査。現地踏査に合わせて、イスラエルではハイファ大学図書館、ツェンマン考古学研究所、イスラエル発掘調査協会、ヨルダンではドイツ考古学研究所、アメリカ中東研究所などで資料収集を行った。

【結論・考察】

発掘調査によって得られた遺跡の年代や土器などの遺物情報によって、デカポリスの都市間でそれぞれの都市の建設状況が大きく異なることが分かった。北に位置するヒッポスやガダラはヘレニズム時代（前4世紀）に建設された遺構がある一方で、南に位置するゲラサやフィラデルフィアにはヘレニズム時代の遺構が検出されず、ローマ帝政初期（後1世紀）以降に都市の建設が始まっており、ヘレニズム時代に起源をもつ都市の連合体であるという従来の考えでは説明がつかないことが明らかになった。ローマ化のプロセスを見ていくと、ガダラが前63年のポンペイウス将軍による東方遠征の恩恵で都市が再建されたことが考古資料、文献史料からもうかがえる一方で、ゲラサは紀元後1世紀以降、とりわけハドリアヌス帝の属州巡察前後に都市が飛躍的に発展しており、都市の発展とローマとのつながりにも差異が認められる。

これらの状況からデカポリスの性格を再検討してみると、デカポリスの諸都市がまとまって行動をした時期は後67年の第1次ユダヤ戦争前後の短い期間で、政治的に特別な権限をもつ集団ではなく、ユダヤに攻撃を受けたギリシア系の都市がまとまって陳情してローマ軍の支援のもとでユダヤ勢力を撃退した際に形成された集団で、この戦争以後はそれぞれの都市が独自にローマと結びつきを強めてローマ化が促進されたと考えられる。